

明治の岡本梅林



この写真は今はなき岡本梅林の明治末年の花見風景である。

梅は岡本 桜は生田 松のよいのが湊川と唱われた岡本は即ちこのことで、江戸時代から大和の月ヶ瀬、摂津の岡本とならび称された梅の名所。花どきには随分と遠方からも客を呼び、数多くの花見茶屋が紅白のまん幕や緋毛せんを敷き、夜ともなればボンボリに灯を入れて賑わったものである。大正の初年までは阪急線がまだないので、阪神電車がひどく宣伝に力こぶを入れ、青木停留所を利用して北へ約千メートル、当時はまだ水田の切株や麦畑の田舎道を、飄箆を肩にした人や、花見弁当を丁稚に持たせた人など雅俗入り交って梅林まで列をなしてつづいた。僕は小学生の頃（大正初年）よく、今の流行歌手ジェリー藤尾クンの祖父、藤尾薫基さん的一家に誘われて父と共にここへ梅見に行った思い出がある。このうちにはいま一人のおじいさん（曾祖父）があつて、アゴヒゲの白い仙

人のような風流老人でいつも長い杖に赤ヒモの飄箆をくくりつけ、テクリテクリと梅林の中を梅を見上げ又見おろすのがクセで僕はいつもこの老人のお供役であつた。昭和十三年の阪神間大水害の前には、有名な谷崎潤一郎先生がこの梅林のすぐ近くに生まれ、「ささめ雪」等の名作をものされたことも逸話として語られているし、江戸から明治へかけては、多くの文人墨客に一段と親しまれた仙境であつたわけで、名詩、名歌、さては名画さえも残されている。僕は田能村竹田、頼山陽、岡本豊彦といった人の岡本梅林を題材にしたものを見たことがあるし、田所千秋の「梅見に岡本にもものして」

花の香を いくその袖にわかつらん

山ふところの梅の八千本

や吉別大魯（蕪村高弟）の

この梅や摩耶ふくゆうべ海匂ふはその頃を偲ぶ名句だと思ふのである。